

富士紀行（60） 須走は東京の庭続き！

（H13/4/4 記）

まもなく春爛漫である。静岡県のチベットとも揶揄される須走にも漸く春が訪れてきた。桜がほころびはじめ、幹部特修課程、幹部上級課程、幹部初級課程等の入校が相次ぎ、富士学校及び須走に活気が戻ってきた。全国から希望に燃え、決意を秘めた21世紀を担う若き自衛官達が集うてきた。

須走は、標高800メートル余り、東京から西に約100kmの位置にある。須走の住民の目は静岡市ではなく、東京を向いている。小山町に11あるゴルフ場も殆どが東京方面からのお客さんである。精神的紐帯は東京にあると言えよう。遊びに行くのも一寸した物を買うのも東京だ。「須走は東京の庭続き」というお囃子が須走音頭にあるが、それはこのような事情を反映しているのだろう。

須走音頭の作曲者は誰だろう、あの有名な帝国海軍の艦隊勤務の厳しさを誇らしげに歌った「月月火水木金金」の作曲者の江口夜詩である。

「江口夜詩（本名・源吾）」

明治36年、岐阜県上石津町（旧・時村）で出生。16歳の時、志をたて海軍軍楽隊に応募し、第一期軍楽補習生として横須賀海兵団に入団。大正10年には当時皇太子であった昭和天皇のヨーロッパ親善旅行随行軍楽隊員のひとりとして抜擢され、6ヶ月間にわたりイギリス・フランス・イタリア等ヨーロッパ各国を歴訪。海軍軍楽隊専属の作曲家としての将来を囑望され、海軍省委託生として、東京音楽学校（現在の東京芸術大学）に6年間通学。大正14年、処女作「千代田城を仰ぎて」。昭和3年、昭和天皇即位大典演奏会で吹奏楽大序曲「挙国の歓喜」を発表。

昭和6年に海軍を退役し、翌7年、亡妻をしのんで作曲した「忘れぬ花」が大ヒット。その後「十九の春」「秋の銀座」「急げ幌馬車」「夕日は落ちて」「心のふるさと」「月月火水木金金」「長崎のザボン売り」「憧れのハワイ航路」「東京の空青い空」「赤いランプの終列車」「瓢箪ブギ」など数々のヒット曲を作曲。生涯にわたる作曲数は4,000曲を超える。

昭和38年、惜しくも病に倒れ、昭和53年12月8日逝去、75歳。江口夜詩の長男、江口浩司氏（海軍兵学校卒）も、作曲家として現在活躍中で、代表作に「下町の太陽」や「忘れな草をあなたに」などがある。

富士学校の学生は、江口夜詩が作曲した「月月・・・」の如くに、日々修練に励んでいる。課題作業に追われ、時間を掛けて訓練手簿を整理し、更には翌日の訓練のための予習に余

念がない。勉強する事は彼等の責務であって当然と言えば当然であるが・・・。部隊勤務から解放されての入校期間は勉学に専念すべきである。自衛官は生涯勉強である。正規の課程としても初任者教育としての候補生学校、幹部初級、上級、そして能力と意欲に応じて更にその上級レベルの教育へと段々に教育を受けられるようになっている。このような親切な組織があろうか。実はそれだけ、幹部の道は険しいということなのだ。小隊長で30名程度の部下の生死を左右するのであるから、険しく厳しいのは当然であり、それが為、昼夜を分かたず精進することが国民の負託に応えることだ。

江口夜詩は、不思議なことに富士学校が所在し、自衛官の子弟が多数通学している須走小学校及び中学校の校歌の作曲者でもある。校歌の作詞者は、高橋掬太郎氏であり、須走音頭の作詞も同じく高橋掬太郎氏である。つまり、須走小学校及び中学校の校歌と須走音頭の作詞、作曲者は同じということである。その経緯は今となっては知る人はいない。

参考までに須走音頭の歌詞を紹介する。歌は三橋美智也

- 1 ハア 花の須走 一度はお出で 富士のお山の表口 雪の高嶺も 雪の高嶺も
おらが里（お囃子）それ踊れや踊れや チョチョンガチョン 須走ア 東京の庭続き

- 4 ハア 願をかけよか 浅間さまに 国の護りは自衛隊 咲けよ匂えよ
咲けよ匂えよ 富士ザクラ （「それ踊れよ・・・」以後のお囃子は同じ）
以下一〇番までの歌詞はキングレコードにレコードに入っている。

江口夜詩が須走小学校、須走音頭そして、「月月木金金」の作曲者であることを教えて貰ったのは、普通科部教務班長中村徹2佐である。深謝。

「籠坂エレジー」と言う歌の作詞・作曲も同じコンビである。